

社会問題の構築主義における「専門家」に関する再検討

—A. アボットの専門職論の考察をとおして—

筑波大学大学院・日本学術振興会 岡村逸郎

1 目的

本報告の目的は、A. アボットの専門職論とそれに依拠する事例研究を考察することをとおして、社会問題の構築主義における「専門家」の位置づけについて再検討をおこなうことである。

2 方法

第 1 に、アボットの専門職論とそれに依拠する事例研究を考察する。第 2 に、社会問題の構築主義において「専門家」がどのように位置づけられてきたのかを考察する。第 3 に、法学者と精神科医を対象にした事例の検討をおこなう。

3 結果

社会問題の構築主義においては、「専門家」が、社会問題化する以前のトラブルが公的なアリーナにおける問題に移行するさいに、重要な働きをするアクターとして位置づけられてきた (Emerson, Robert M. and Sheldon L. Messinger 1977)。また、社会問題が恒常的な問題として持続するさいに、重要な働きをするアクターとして位置づけられてきた (Best, Joel 1999)。さらに、社会問題化が推移する一般的な過程を考察するさいに、言及されてきた (Best, Joel 2012)。これらの視角に依拠して、日本でも複数の事例研究が蓄積されてきた。

しかし以上の研究においては、異なる専門職集団間の相互作用が十分に検討されてこなかった。そこで本報告が注目するのが、アボットの専門職論である。

アボットは、専門職と特定の職務との結びつきを、「管轄権 (jurisdiction)」として定義する。さらに、専門職システムを、この管轄権が排他的なものであるために、複数の専門職集団が相互に依存することで成立するものとして捉える。そのうえで、専門職システムが複数の専門職集団が管轄権の領有をめぐる対立するなかで発展する過程を、歴史的に記述する視角を提示する (Abbott 1988)。この視角に依拠して、日本でも複数の事例研究が蓄積されてきた。

4 結論

社会問題の構築主義にアボットの専門職論を接合することによってえられる視角は、以下のとおりである。第 1 に、ある社会問題の歴史的な構築過程を、複数の専門職集団間の相互作用に注目して記述することである。第 2 に、そこでの相互作用を、それぞれの専門職集団において用いられる固有のレトリックや言説的資源に注目して記述することである。以上の 2 点に着目することによって、社会問題の構築主義の事例研究をさらに展開していくことが期待できる。

文献

Abbott, Andrew, 1988, *The System of Professions: An Essay on the Division of Expert Labor*, Chicago and London: University of Chicago Press.

Best, Joel, 1999, *Random Violence: How We Talk about New Crimes and New Victims*, California: University of California Press.

———, 2012, *Social Problems*, 2nd ed., New York: W. W. Norton & Company.

Emerson, Robert M. and Sheldon L. Messinger, 1977, "The Micro-Politics of Trouble," *Social Problems*, 25(2): 121-34.